メランヒトン邦訳ノート（2）

菱刈　晃夫

福音と哲学の違いについて（1527年）
De discrimine Evangelii et Philosophiae.

クスカワによれば、これは演説というよりはむしろ討論の記録といえるもので、論点となった主要な問題が列挙されている（Cf. Philip Melanchthon, *Orations on Philosophy and Education*, ed. Sachiko Kusukawa, trans. Christine F.Salazar, Cambridge 1999, p.23.)。それは1527年にメランヒトンによって行われた「コロサイ信徒への手紙」2章8節[1]に関する一連の討論シリーズに属している。詳しくは、S.Kusukawa, *The Transformation of Natural Philosophy: The Case of Philip Melanchthon*, Cambridge 1995, pp.65-9. を参照されたい。さらに、拙著『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』（渓水社、2001年）、128頁以降も参照されよ。前号のメランヒトン邦訳ノート（1）に収められた「この世の義(なだ)しさとキリスト教の義しさの違い」と同様、理性の領域と信仰の領域の明確な区別がここでも見られ、教育の原理ともなる、理性や哲学への一定かつ安定したメランヒトンの信頼の態度を、再度読みとることがでよう。

テキスト（ラテン語）としては、*Corpus Reformatorum Philipi Melanchthonis Opera quae supersunt omnia*, hrsg.von K.G.Bretschneider und H.E.Bindseil, 28 Bde, Halle und Braunschweig 1834-60.（今後CR.と略記）第12巻、689-91頁を用いた。なお現代語訳として、Ph.Melanchthon,*op.cit.*,pp.23-5. を参照した。

＊　＊　＊

パウロが「哲学によってだまされないようにしなさい」というとき、彼は哲学を否認したのではなく、その濫用に注意を促したのである。ちょうど誰かが「ワインによって誘惑されないよう注意しなさい」といったのと同様、ワインをだめだとい

うのではなく、その濫用〔飲みすぎ〕を注意したように。

ところでパウロは、教会でもっとも有害となる種類の濫用について述べている。すなわち、人間の理性による教え以外のものを教えていないかのように聖書を受け取る場合である。というのも、狡猾な人々がずる賢い解釈でもって福音を哲学や人間理性による教えに変えてしまうのは簡単だから。ちょうど背教者ユリアヌス[2]がキリスト者の無知を責めたように。なぜなら、聖書の文字の悪しき解釈が不条理な教えを生み出してしまったから。

哲学は、語りの術〔レトリック〕、自然に関する教説〔自然哲学〕そして市民道徳についての教えを内容としている。これを教えること〔あるいは教説〕は、神による善き創造であり、すべての自然の恵みのなかでもっとも肝要なことである。そして、この世の身体的ならびに市民的生活にとってこれ〔哲学〕は、食物や飲み物や公の法とかいったのと同様に必要なものである。

道徳哲学は市民道徳に関するまさに神の法である。

もっとも愚かな人々は、哲学と福音が、両方の教えとも道徳に関する法ではあるが、福音はさらに、復讐してはならないとかそれに似た外的な行いに関する若干の法を付け加えると思いなす。

反対にもし誰かが福音から、哲学や皇帝の法と齟齬をきたすような市民生活に関する法を分けるならば、ただちに彼は見向きもされなくなる〔はずである〕。

ちょうどヤコブの手とエサウの手が似ているように、福音は、哲学や法そのものが教えているような市民生活に関することの他には、確かに何も教えていない。

ポンポニウス・アッティクス[3]と使徒パウロとは、神について一致しないので異なっている。一方は神が人間のことがらについて世話をしてくれるかどうか疑い、神なしで生きるのに対して、他方は、確かに神は罰すると宣言する。同様に、神はキリストのゆえに赦し、わたしたちのことを気遣い〔わたしたちのいうことを〕聞かれると。どちらとも市民道徳を何とするかについては相違していない。

ヨセフもダビデもイザヤもダニエルも、ちょうどファビウスやスキピオやテミストクレスのように[4]、政治家であった。彼らはその市民的な生活形態については相違していないが、しかし神信仰においては違っていた。

福音は哲学でも法でもなく、罪の赦しであり、キリストによる和解と永遠の生命の約束である。人間の理性は自らこのことを理解できない。

というわけで従って、福音はわたしたちに対して神の意志を教え、哲学は理性に属することがらを教える。それは決して神の意志について何かを主張することはなく、福音が哲学ではないということは、きわめて明白である。

そして、どれほど理性が神の意志について判断しようとも、確かにここから自ずと、神がキリストのゆえに無償でわたしたちを赦されると推論されたり、主張したりはしない。

しかし、福音は善き道徳とも賛同し、これに従うことを命じる。

ちょうどキリスト者が神の法を敬虔に用いるように、哲学をも彼は敬虔に用いることができる。そして、哲学が神の法であることを知っているので、ますます彼は哲学の教えと善き書物の正しい意見とを尊重する。

ところで哲学が神の法であることは、それが自然の原因と結果の知であって、しかも神によって支配されていることからも理解できよう。その結果、哲学は神の法なのであり、かの聖なる秩序に関する教えである。

天文学がちょうど天の動きに関する知識であるのと同じように—それは神によって整えられているのだが—、道徳哲学は行いに関する知識である。つまり、神が人間の精神のなかで整える、原因と結果についての知識である。

ゆえにわたしたちは哲学をすべての人々の見解とは呼ばずに、論証をともなった教えとよぶ。

哲学者たちがいうように、真理はたった1つだけあり、よって論証からほとんどはずれることのない、ただ1つの哲学だけが真実である。

ストア哲学はアパテイア〔情念からの自由〕について正しく判定はしていないし、望ましいことがらや望ましくないことがらについて、奇妙に思索している。さらに、ストア派の教えほど福音に似ている哲学はないというほど、馬鹿げたことはない。

「言は肉となった」[ヨハネ 1-14] という一部を除いて、キリスト教の教えがプラトニストのなかに見出されるというアウグスティヌスも、やはり馬鹿げている。

アウグスティヌスが、キリスト教の著述家として読むことのできる哲学者において道徳に関するそうした法を見出したというのならば、彼は正しく語ったことになる。というのも哲学者は福音については完全に無知であるから。彼らはキリストのゆえに信仰を通じて和解に至ることを認識していない。〔ただ〕それ以外においては、キリスト者とともに市民道徳についての法を共有している。

キリストは道徳に関して新しい法をもたらすために現われたのではない。というのも、それ以前に理性は〔そうした〕法を知っていたのだから。さらに法を持ち出すことは当局の問題であって、これらの法を打ち立てるのに新しい啓示など必要ではない。こうしたことは理性の判断に属することがらである。

エピクロス派の哲学も善の目的については正しく判断しない。そして、ヴァッラ[5]がすべての哲学者よりも前にエピクロス派を好むというのは馬鹿げている。

アリストテレス哲学は非常に熱心に論証を求める。ゆえに、それは他の学派をはるかに凌駕している。そしてこれは善の目的ならびに徳の本性について正しく判断する。ただし少なくとも市民的な生活や市民的な徳について理解される限りにおいて。

しかしながら哲学とは、わたしたちに受け継がれている、確かにその要素はアリストテレスのなかにあるような、アリストテレスによって書かれた書物のなかにすべてが含まれている狭い範囲に飲み込まれるわけではない。数学者や自然学者や法律学者は、こうしたものを基礎に建て増していくのである。

以上わたしたちは福音と哲学との違いについて語ってきた。しかし、神の法と哲学との違いについて語るのはまた別のことがらである。これら〔神の法と哲学〕はちょうど十戒と自然法が一致するように調和する。というのも哲学は、論証を有するという点において、自然法そのものであるから。が、十戒は神へと向かうわたしたちの心の動きについてより明確な指針を与えてくれるのである。

注

1) 人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません（新共同訳）。

2) ユリアヌス（Flavius Claudius Julianus, 332-363）はローマ皇帝（361/63）異教に転向したためキリスト教から「背教者：Apostata」と呼ばれた。

3) アッティクス（Titus Pomponius Atticus, 109-32 BC）はキケローの親友。彼の『アッティクスへの手紙』を参照。

4) ファビウス（Quintus Fabius Maximus, c.275-203 BC）は第2ポエニ戦争時代のローマの軍人。スキピオ（Publius Cornelius Scipio Aemilianus, c.185-129 BC）は第3ポエニ戦

争時統領としてカルタゴを攻め、これを降してポエニ戦争を終わらせた。若い頃からギリシアの学芸を愛し、多くの学者や文人を集めた彼のサークルは当時の上流社会を代表するもの。テミストクレス（Themistocles, c.524-c.459 BC）はアテナイの政治家で第2ペルシア戦争を勝利に導いた。

5）ヴァッラ（Lorenzo Valla, 1405/7-1457）はイタリアのヒューマニスト。パヴィア大学で修辞学の教授。キリスト教的なエピクロス主義を最善の哲学とする。